

不思議な夜

小倉 一純

中野で、都心の小学生時代を過ごした僕は、畑や鎮守ちんじゅの森がまだ残る練馬で、幸福な中学生時代を送った。

区立中学校は自宅から歩いて三分のところにあり、放課後の楽しみはもっぱら自転車に乗ることだった。

週二回は石神井川を越えたところにある、早稲田学習会という私塾に通っていた。この塾通いにも自転車を使っていた。夜の九時半頃、塾が終わると、同じ教室の仲間七、八人と徒党を組んで夜の街を自転車で爆走した。どこぞの親父おやじさんがステテコに腹巻姿で飛び出して来て「うるさいぞ」と怒鳴り声を上げることもあったが皆、意にも介さなかった。夜間だというのに僕らはハンドルの警報用の鈴を鳴らし続けていた。

工事現場の夜の資材置き場の奥にたむろする野犬の群れに襲われたこともあった。自慢の脚力で全力でペダルを漕こいだが、後少しで、野犬にアキレス筋を噛かまれるところだった。

そいつの口の周りの産毛が僕のアキレス筋の地肌に触れた感触が今も残っている。

塾仲間は皆、同じ練馬中学校の同級生で、中でも僕は武藤君と親しくしていた。

どんな理由だったかは忘れたが、僕らは時々、二人乗りをして、夜の練馬を巡回することがあった。

その日はもう午後十時近くになっていて、杉並区との区界も近い、大きな寺院の門前を行き過ぎるところだった。

僕は、武藤君のサイクリング車の荷台に跨またがり彼と一緒に前方を注視していた。

その門を過ぎたところが交差点になっていた。直進する道も、交差している道も、大した幅ではなく、外灯がほとんどない中で、どちらが優先道路なのか区別がつかなかった。もつとも免許証を持っていなかったから、そんなことを考える思考回路はまだ働かなかった。

右手には寺院の大門、左手に夜の墓地が、

鬱蒼^{うつそう}と広がっていた。僕らはその交差点の手前でスピードを上げ、一気に通り過ぎようとしていた。

と、その時である。自転車が急停止をした。屈強な男に、僕の跨った荷台の最後尾を握られ、後ろへ引っ張られたかのような感触を、僕らは覚えた。

後で話し合ったのだが、この時のその感触は、二人ともまったく同じように感じていた。

しかも、武藤君はブレーキをかけなかったし、僕も何も手を下してはいない。

止まったその次の瞬間、一台の車が右から左へと走り抜けて行った。車はライトを点けていたが、どういうわけか目の前を通過するまでその光には気が付かなかった。

やはり靈魂は実在するのか。幽霊は、時として、生きている人間にも手を貸すことがあるのだろうか。

今も時々この不思議な夜を思い出す。